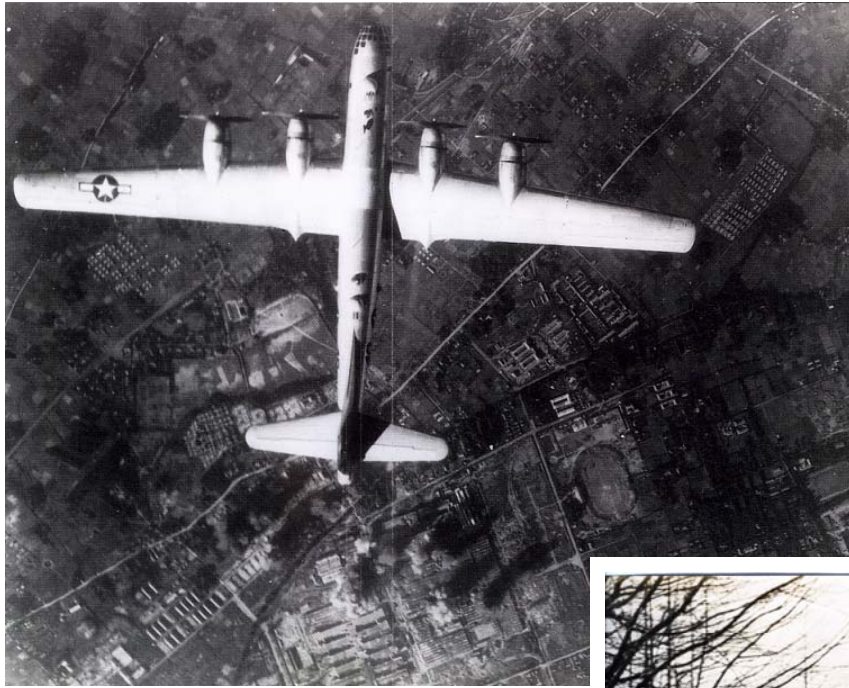


第一部 武蔵野の空襲とその記憶



中島飛行機武蔵製作所を爆撃するB29
(米国公文書館所蔵)



廃墟となった中島飛行機武蔵製作所時計台
(昭和26年 中村正英氏撮影)

吉祥寺での空襲体験

吉祥寺東町 服部 賢昌

昭和十九年十一月に中島飛行機武蔵製作所に爆弾が落ち出したとき、工場から離れた吉祥寺で見えていましたので、あまり恐怖感はありませんでした。高射砲の破片が、本堂の屋根を破いたりして、爆弾より高射砲の破片のほうが、被害が多かったくらいでした。

当時、私は今の日大二高にあたる旧制中学の三年生で、仲間たちは、ほぼ動員に行っていました。学校はユニークで、戦争中、鉄砲をかつぐ授業や、柔道、剣道、教練の体育があるのですが、農業とか、馬術までさせられました。

馬が三十数頭いましたが、えさがなくなり、そのえさの草刈りのために、私たちは動員に行かずに、十五人ほど学校に残されていたのです。今の鷺宮辺りで草刈りをやり、持って帰ってきました。広い野原のようなところで、あの辺りの川は一面、沼みたいになっていて、そこに二頭を放し飼いにして、草を食べさせている間に、魚釣りをしたり、弁当を食べたりしました。ある時、釣った魚を焚き火で焼いていましたら、その煙がアメリカ軍のグラマン戦闘機に見つかりました。三機来て、いきなり急降下してきて、機

銃弾の土煙がバツと上がりましたが、五十メートルぐらい離れていたもので、遊ばれたのだと思います。また、ある時は飛行機が西南西ぐらいの進路から、斜めに中島飛行機に向かって行き、爆弾を落とすと、進路を変え私の真上を通って行きました。もう飛行機は爆弾を持っていないのですが、一番怖いのが、撃った高射砲の破片の直撃でした。

私の家族は、家の裏に防空壕を掘ってみんなで入りましたが、先代と私が二人で死んでしまうと、後が困ってしまうので、庭に一人用の防空壕を作って、別々の防空壕に入っていました。私は爆弾の落ちる音は知っています。落ちてくる風を切る音、ガツという音と、爆弾の破裂する音は知っているのですが、吉祥寺の辺りではあまり怖い思いをしたことはありませんでした。空襲が終わった後、真っ黒い煙が上がっている、東京中から消防車が集まってくる、そのぐらいの記憶しかありません。これは終戦後ですけれども、中島飛行機の後片づけに行って、中島飛行機がめちやくちやにやられた惨状を初めて目のあたりにしました。吉祥寺の辺りの人たちはみんな見物です。三月十日の空襲でも、東のほうが真っ赤になってしまっても、焼けていたのは阿佐ヶ谷までですから、焼けているなという程度でした。

昭和二十年二月ぐらいのことでしょう。か、線路を守るた

めに、中央線の線路の脇にある家を全部壊したのです。私は、阿佐ヶ谷のあたりから、今の荻窪の光明院あたりぐらゐまで、工兵隊と一緒に家を壊して歩きました。

焼夷弾は、二尺ぐらいで六角形でした。それを三十六個束ねて、金属のテープで結んであり、それは三段になっていて、その縛っているテープに竹とんぼみたいなプロペラがついていました。落ちてくるときに、回転して破裂するのです。それが破裂して帯が切れるとパツと広がる。焼夷弾の中には缶のようなふたがあつて、中をあけると、それはゼリーをガーゼでくるんだようなものが入っているだけです。焼夷弾の下に起爆剤が入っていて、落ちると起爆剤が破裂して、弾の中に入っているゼリーがあたりに撒き散らされて、くっついて燃え広がってしまうのです。

しかし、これが草や枯葉の積んであるところに落ちると、衝撃が少ないので、破裂しないものもありました。

焼夷弾にはボタンがあつて、そのボタンを押すと、中の板が破裂しません。阿佐ヶ谷や高円寺のあたりで空襲があつた後、焼夷弾の不発弾が見つかったときは、みんなそのボタンを押したものです。学校に荻窪警察と荻窪消防署の人たちが来て、焼夷弾の原理を全部説明してくれましたので、皆このことを知っていたのです。

焼夷弾の束が二本あると、その焼夷弾を使って風呂を一

回沸かすことができずました。草刈りして帰ってきた後、途中で何本か拾ってきて、焼夷弾で風呂を沸かして、入ったことがあります。アメリカの爆弾で風呂に入ったのは、私達くらいかもしれません。

当時、井の頭公園のお茶の水の近くに木工所がありました。これは、中島飛行機の空襲で亡くなった方のお棺をつくるために、井の頭公園にあった杉を材料として切り、公園の中に木工所をつくり、その場で製品にしていたそうです。井の頭公園といえば、私達はよく松根油を採っていました。飛行機のガソリン代わりだったのです。だから、アメリカの飛行機が落ちると真っ白い煙、日本の飛行機が落ちると、真っ黒い煙でした。もう煙から違ったのでした。

B 29が日本の高射砲に打ち落とされたことがありました。久我山の付近に、相当口径の大きい高射砲がありました。私はそのときに気がつかなかったのですが、いとこが、落下傘が飛び出したと言って、しばらく見ていると、落下傘が開かずに、そのまま落ちていくところだけは見えませんでした。B 29が落ちた久我山の現場に行つたのですが、十何人か乗っていて、全員死んでいましたが、持っているものがすごかったのです。救命ボートから何からみんな持っていました。缶詰もあり、欲しかったのですが、やっぱり手をつけてはいけなないと思ひ、周りで見ていました。日

本のものとは全然違いましたね。

戦後の吉祥寺の様子は、駅前今のハモニカ横丁があるところは全部壊してしまつて、原っぱになっていました。それが戦後、露店商が出て、それを通称やみ市と言っていました。あの頃は全部統制ですから、韓国の人たちのほうが大威張りでした。統制品を売っていても、おまわりさんが手を出せないわけです。日本じゃなくなつてしまつたからです。

新円、封鎖というものがあつて、要するに、財産税をかけて、全部お金を封鎖してしまつたことがあります。当初、十円以上は全部証紙を貼らないと使えませんでした。何月何日までに銀行に預けて、使える額が一日幾らと決まつていました。一人一日百円ぐらいでしたね。ただ、あるとき中島製作所の創始者中島知久平さんが、一人一日三万円認めると言つたのを、GHQが、ぜいたくだと言つて、一万円にさせられたという話を知久平さんの奥さんから聞いたことがあります。中島飛行機あたりは優遇されていたのかなと思います。

当時の食事はひどいものでした。終戦の八月十五日ぐらゐまで、馬の草刈りをしているころは、コウリヤンや大豆、干したトウモロコシなど色々混ぜてあつたけれども、米粒を食べていました。終戦後の二学期の秋ぐらいから、本当に

食べものがなくなりました。記憶があるのは、干したトウモロコシを粗削りにして、小麦粉で固めたものを鯨の脂か何かで焼いたもの。それは硬くて歯ごたえがあるから、食事に三十分ぐらいかかりました。

終戦後のほうが食糧事情は悪かったです。組織が壊れてしまつていきますから、流通機構が機能しなくなり、配給も来なくなりました。初めは、米は一人二合七勺の三十日分がちゃんと配給になつていたのが、そのうちに、お米の代わりに砂糖が配給されるようなことがありました。親たちは大変です。食事を出さなければなりませんから。今はかぼちゃもおいしくなつたけれども、うらなりのかぼちゃを切つて、中の種を取つて、それに小麦粉に膨らし粉を入れて、ふかしたものが弁当でした。母が山梨の農家出身なので、土曜日になると母の実家に行つて、ちゃんと白米を食べて、帰りにおにぎりをたくさんもらつて、米から何からめいっぱい背負つて運んでいました。

戦中は、馬に食わせなければなりませんから、もう土日なし、夏休みありません。私が学校で勉強をすることができたのは、中学一年まででした。学校で世話をしていた馬は、戦後、軍に接収され、破傷風の血清をとるために、一頭も残りませんでした。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

武蔵野の戦後の不発弾処理とグリーンパーク球場の造成

八幡町 岡本 勇

私は、昭和十八年十二月二十五日に岡山の工兵隊に入隊しました。そこで教育を受けたのち、約五百人が外地に行くことが決まり、私も編制されました。ところが「今度、少年兵が四月に入隊するから、その少年兵の教育係で残れ。」ということ、少年兵の教育係になりました。少年兵教育係になった六人が残り、それでみんなが船に乗るのを見送りました。そのうち、半年もしないうちに戦友が全部やられてしまいました。それは、皆、戦地に向かう輸送船が沈んでしまったからです。だから、私の戦友は二、三人しかいません。戦友がいないのは寂しいものです。その後、教育係を半年間、一生懸命やりましたが、ついに戦地へ行くことが決まりました。

屋根はあるものの、窓も何もなく外も見えない貨車で、岡山から二日三晩かかり、着いたところが小田原でした。そこから横須賀へ行き、船に乗ると思っていたのですが、一向に横須賀へ行く気配はなく、小田原の停車場の横のほうに貨物列車をつけたまま、二日間そこにおりました。

二日目の十一時ごろになって、出発の命令が出て、どこ

へ出発するのかわかと思ったら、私ども百二十人ぐらいは小田原高校の体育館に行き、そこで三日、四日は何もやることもなく過ごしていました。そうこうしているうち、編成・配属が行われ、小田原は東京に近く、相模湾の中で一番平らなところなので、一番敵が攻めやすいということで、陣地構築の指導をすることになりました。

工兵隊であったので、小田原の早川にあるミカン山に横穴を掘って、大砲を備え、敵に対して構えていましたが、米軍の偵察機が飛んできても、来たる本土決戦に備え、砲弾を温存するため、使うことができずに、一向に打つ気配はありません。そのうち、B 29が小田原に富士山を目標けて来るようになりました。富士山を目標けて飛び、別な方へ飛んでいく。「あれはどこへ行く。」と思っても、大本営の発表でもあまり爆弾を落とすことは言いません。中島飛行機がちよつと被害を受けたことは新聞に載っても、大きな被害は受けたというような記事は一つもありませんでした。それが三月、四月になったら、ひっきりなしにB 29の編隊や偵察機が現れるようになりました。本土決戦も近づいたと考えていました。

終戦の一週間前のことです。「十五日に小田原を攻撃する」とのビラが飛行機からまかれました。「こんなことを言っても来るわけないじゃないか。」とたかをくくって

たのですが、十五日の朝、小田原市が空襲で燃えてしまったのです。小田原市の三分の二がやられたのです。

終戦の日を迎え、進駐軍がやってくることになる。「兵隊の服を着て、その辺をうろろしたら殺されるから、早くどこかへ雲隠れしろ。」と話があり、私は岡山へすぐに帰りました。しばらくすると、「小田原の工兵隊で使用していた道具はどうした？」と手紙が届きました。すぐに、私は小田原の早川まで戻ったところ、ちょうどミカンの取り入れ時期で「男衆がいないので、手伝ってくれないか。」と、約十五日間採り入れを手伝いました。そこでたまたま居合わせた人に「これから武蔵野の中島飛行機で空襲によりできた爆弾の穴埋めに行くのだが、おまえも見に行かないか」と誘われました。私は一緒に連れていってもらい、武蔵野の工場の跡に行きました。中島の工場はとても大きかったのですが、至るところ爆弾の穴で、荒れ放題でした。結局、私は、富士産業という中島飛行機の残務整理を行う傘下の会社で、爆弾であいた穴埋めの仕事を始めました。

最初は東工場の穴埋めの仕事を始めました。この工場の屋根はスレートで、上にそのスレートをとめる材木が乗っていました。その材木を作業員や我々が、リヤカーに積んで薪として売ったら、薪が不足していたので、結構買ってくれました。すると、周辺の人が昼間、その薪を取りに来

るようになりました。よその者が勝手に工場内に入っては困るので、鉄筋で塀を作ることになりました。十人がかりで工場の周囲に塀を作りましたが、三カ月かかりました。

二月の寒いある日のことです。雪が降る日で、どこかで暖をとろうということになり、全く雪が積もっていなかった浄化槽のあった穴で薪を燃やしていました。すると中の一人がその浄化槽の中から二百五十キロの爆弾を見つけたのです。すぐに火を消させたのですが、出た爆弾をどうするかという話になりました。誰に話したら良いかも分からず、放っておくわけにいかず、富士産業の社長に報告すると、「放っておくと大変なことになる。警察に届ける前に、何とかしなきゃいけない。」といういろいろ考えた挙げ句、私が爆弾の雷管を抜くことになりました。工兵隊にいた経験からスパナを調達して、爆弾を無事処理しました。そのおかげで、最初は爆弾の穴埋めの仕事でやって来たのですが、あちらこちらから不発弾が出るもので、不発弾の処理をするようになりました。

ある日一トン爆弾の処理を行うことになりました。爆弾は深さ十メートルの穴にもぐっていて、落ちたときの爆弾の慣性で、さらに、落ちた穴から横へ三メートル、四メートルとずれているのです。だから、落ちたところに必ずしも爆弾があるとは考えられないのです。爆弾を掘り当て、

今度は信管を抜く際になり、使用するレンチがアメリカはインチサイズのため、日本のものとサイズが合わず、どうしても抜くことができません。それで米軍の横田基地に行つて、将校からレンチを譲ってもらいました。それをきつかけに「爆弾の処理は岡本だ。」と、爆弾の穴埋めより工場の中のあちらこちらにある不発弾の処理を専門に行うようになりました。



体験を語る岡本氏(平成21年12月21日撮影)

昭和二十五年ごろ、工場の跡がきれいになったので、野球場を作る話が持ち上がりました。そこで私が野球場を作る指揮を執ることになり、秋田の横手や大曲から二百名、若い者を連れてきたり、宿舎を作ったり、関東一円から機械を調達し、穴を掘ったり埋めたり、爆弾の処理を続けながら、野球場を整備していきました。しかし、こんなところで野球場を作ってもどうにもならないだろうというような話が出てきました。そこで以前、通信大臣だった松前重義さんが、その後、仙台の鉄道局長をやられていたのが、松前さんを社長にすれば、線路が一番早く敷けるのではないかという話になり、松前さんに野球場の社長になっていただきました。戦争中には工場への引込み線路がありました。今はグリーンパーク遊歩道になっていますが、松前さんが就任したらすぐに、引込み線跡に、野球場への線路を敷くことができました。球場造成の工事は、夜も昼も突貫でやれ、二年間でやれと言われました。私にはそんなに経験はありませんでした。自分らで埋めた平らな土地にトロッコで、今度は今の市役所の辺に土手を作りました。土手の一番高いところは五メートルぐらいありました。土手をつくったあと、一尺四方ぐらいの板でぼんぼんたたきながら、芝を植えていきました。そして、昭和二十六年五月五日こどもの日に開園することが決まりました。開園までに

芝が根づかなければいけないので、その間三カ月は、桶で水を汲んでいって外野に水をまき続けました。今みたいにホースでまくわけではないので、大変な作業でした。

開園の日には、花火を上げ、セレモニーを行いました。試合開始の約二時間ほど前に、子どもを外野に一人から入れてしまいました。子どもは外野をとび回っていました。ところが野球開始直前に、強い風が吹きはじめました。目をあけていられないくらいの強さでした。すると「こんなところで野球ができるのか。」と野球の選手が言い出したのです。その日は無事に野球を終えることができたのですが、結局、野球の試合は年間十試合程度しか行われませんでした。当時の国鉄スワローズの金田選手が「とにかくグリーンパークじゃない、ほこりパークだ。」と言ったことが新聞に載り、それで人気が無くなってしまいました。こんなところまで、野球をやりに来られないということ、プロ野球はすぐ手を引いてしまいました。その後、六大学野球のグラウンドとして使いましたが、それでもやはり人は来ませんでした。そのうち、経営難に陥り、二年間ぐらい草野球場にして、使いたい人が使えばいいというような感じでやっていましたが、それでは野球場としては成立しないので、この土地を今の公団に買っていただきました。現在、高齢者総合センターの建物の裏から公団側に行きます

と、一メートルぐらい道路が下がっています。これは外野の一番端になります。そこからずっと土手があり、今の市役所のほうがホームベースになります。

昭和三十二年ごろ、当時の市長に「今度は工場の外の爆弾処理を自衛隊と行うのだが、入札でやるのでお前も会社を作り、やらないか」と声をかけられました。そこで岡本組という会社をスタートさせることになりました。会社を立ち上げ指名参加願を出したのですが、応募する会社は私一社だけで、他は誰も応募しませんでした。



現在のグリーンパークのゴルフ練習場の角のあたりに爆弾が落ちていたようだということで、爆弾を探すことになったことなのです。自衛隊が二十人くらい来ていました。その時分、我々は手で掘っていたのですが、自衛隊はユニボとブルドーザーを持ってきて、金属探知機で一先懸命地面を探していました。昔の金属探知機は一メートルぐらいいし効果がありません。自衛隊が二十人、あちらを掘り、こちらを掘りして、掘り回して三日間やったのですが爆弾を発見することができませんでした。私は初めから爆弾のあることは間違いないと思っていたので、「自衛隊はもう帰ってくれ。」と言いました。そのあと五、六人を連れ、掘っている、落ちていた場所は探していたところから七メートルもずれていました。そこから、突っつき棒とって、三メートルの棒で突っつきながら斜めに穴を掘って爆弾を探し当てたのですが、穴の中は、土が崩れてくるのです。私は命綱で胴締めをし、上から二人ぐらいに引張らせておきました。ボロボロと土が崩れてきたら、綱を引張ると、すぐに上で二人が引張り上げてくれるのです。あとちよつとのことと、死にそうになったことが二、三回ありました。

ある時、いまの都民銀行のところ（中町三丁目）に建物を建てた人から、「爆弾が落ちているから調べてくれ。」と

頼まれ、調べることになりました。ところが、いざ調べてみても爆弾の穴が見つからないのです。「これは、ひよつとしたら破裂しているのかな。」と思いながら、二日間作業を続けました。

昼休みに寝そべっていると、そばに樫の木が五本あったのですが、その樫の中に爆弾の破片みたいのが刺さっているのを見つけました。調べてみたら、やはり爆弾の破片でした。爆弾は破裂した後なので、ここは大丈夫ということになりました。ところが、つい最近、東京都による道路拡幅によりこのケヤキを切ることが決まりました。私は「ケヤキを切っては困る。これだけ傷を受けて爆弾の破片が突き刺さっているのだから、材木にも何にもならない。どこかへ移植してくれ。」とお願いしたところ、三鷹の天文台の門のわきへ移植されました。

爆弾で傷ついた樫の木でさえ、傷つきながら生きているのだから、人間も生きられるだけ楽しく生きるのが大切です。嫌々生きてもしようがないです。また、病気で死ぬ分には仕方ないけど、生きていこうとは思っています。自分のためだと思って頑張っています。私は八十六歳だけど、今でも何だかんだと言いながら皆さんにお世話になりながらやっています。

私の生い立ちを話すと、岡山県と兵庫県と鳥取県の県境

にある宮本武蔵の生まれた宮本村で生まれました。歴史のあるところで、いろいろなことを学んできました。子どもの頃は動物と一緒に生活していました。武蔵野へ来て六十四年、皆さんとご一緒に、お世話になってきましたが、今後ともひとつよろしくお願ひしたいと思います。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。



東京スタジアム(昭和26年7月 撮影:中村正英氏)

勤労働員・初めての空襲 十一月二十四日の爆撃

三鷹市 内藤 昭雄

昭和十九年の秋、その頃私は旧淀橋区（現・新宿区）内の国民学校高等科二年生でした。当時、私達を取り巻く環境は国家総動員の名の下に日々勤労奉仕に迫われ、落ち着いて勉強が出来る状況ではありませんでした。

そしてある日、担任の先生から二年生全員は勤労働員として、軍需工場への派遣が申し渡されました。派遣先の一つは、三鷹（現武蔵野市）の中島飛行機武蔵製作所で、もう一つは高田馬場近くの時計会社でした。この会社は時計の他、主に軍需工場として高射砲弾の信管などを作っている工場でした。二年生達は三つの組で構成され、その内二つの組は中島へ、残りの組は時計会社と分けられた為、私の組は結局中島に派遣される事になりました。学校は西武新宿線の下落合駅に近い事から、工場へは東伏見の駅を経由して通う様になりました。

当日の朝、東伏見の駅前には既に西武沿線から動員されたと思われる男女の学生達がそれぞれに整列していました。私達も整列し点呼の後、担任と級長を先頭に工場へと向かって行きました。すると驚いたことに、北口正門には

銃を持った兵士が警備の為か立っていました。すると、先頭にいた級長は「歩調取れ、頭右つ・・・」と号令を掛けたので慌てて敬礼して入りましたが、何時しか私達も兵士になった様な気がして、戸惑ってしまいました。改めて、第一級の軍需工場の厳しさを実感させられました。

工場では、担当者からそれぞれに配属の指示があり、行った先は東工場三階の発動機の組立現場でした。私の作業は、分解された部品の内、ボルト・ナット・座金などを選択別、既に曲げられた座金などはハンマーで叩いて修正、石油で洗浄の後、錆止めに油漬けにする。などが主な仕事でした。この作業は女子学生の他、熊谷の陸軍少年飛行学校生徒や太刀洗の特別幹部候補生などが加わって行いましたが、何故、飛行学校から派遣されて来たのか不思議に思い尋ねた所、戦局が厳しく、特に飛行機の不足を補う為、学校での学習や訓練どころではない、直接、生産現場への派遣が「軍部の方針」という事で派遣された由、改めて戦局の厳しさを感じました。しかし、女子学生を交えた作業では若い者同士の事で会話も弾みがちでしたが、時折り監督官や憲兵が巡回して来ると、ピリピリと緊張して気の毒な程でした。寒くなるに従い冷たい石油の為、指先の白く濁った爪の痛みで悩む女子学生は辛そうでした。

程なく作業にも慣れて来た十一月一日の昼頃、空襲警報

が鳴り空を見上げると、青空高く銀色に輝くB 29が一機、悠々と飛んでいて、遙か下の方で高射砲の弾が破裂していました。後で聞くと、多分、偵察飛行だろうとの話でしたが、これが後の大空爆の序章になるうとは、考えてもみませんでした。

やがて十一月二十四日の昼休み、級友と誘い合わせて地下食堂で昼食を取り、大勢が談笑していました。すると、突然「ドーン」という爆発の音と地響きがしました。皆、食事を止め、一瞬の静寂の後、「空襲だ！」の声と共に我に返った様に一斉にドア目掛けて殺到しました。私達も慌てて後に続き階段を駆け上りました。

すると、逆にならば担架に怪我人を乗せた四、五人の人達が駆け降りて来た為に危うくぶつかりそうになりました。見ると全身、大火傷を負い髪の毛も焦げてチリチリと成って、生死の程も判らぬ有様でした。地上に出ると、学生は地下道に避難する様にとの指示があり、急いで又、別の地下道に入って行きました。すると、既に男子、女子の学生が沢山おり、相次ぐ爆発の音に怯えた女子学生達が大声で騒いでいました。すると、中にいた監督官の将校が、いきなり軍刀を抜き、「貴様ら・・・静かにしないとたき切るぞ・・・」と、どなりましたので一瞬にして静まり返りました。後で思えば、大勢の女学生を前にして、軍人

としての自分を誇示したかった様に見えました。私達は恐くなったので地下道の奥へと進み、コンクリートの床に腰を下ろしていました。

外からは相次いで聞こえてくる爆発の音や地響きがする度に天井からコンクリートの破片がバラバラと落ち、今にも頭上から爆弾が落下する様に思え、生まれて初めての恐怖から思わず抱えていた膝の震えが止まりませんでした。やがて空襲が治まり外に出て工場の建物を見ると、三階の壁まで吹き上げられた土砂がべったりと着いた上、窓ガラスは割れ、鉄棒が外に飛び出して無残な有様でした。建物の中はコンクリートの破片で足の踏み場もなく、やつと組立の場所に着くと、先に戻った学生達が互いの無事を確かめ合っておりました。しかし、一緒にいる兵士達は空襲の際でも「命令で」離れる事が出来ず、「その場での退避」の由、軍人とは言え、思わず気の毒になりました。

(記)後の記録によれば、この日の被害は、死傷者百三十二名。内死者五十七名、負傷者七十五名でした。

武蔵野での空襲体験

吉祥寺本町 肥田 實次

私は、昭和十七年に中野で徴兵検査を受けました。検査では体格がいか、目、鼻、口が正常に働くかどうかの検査を受けました。結果は、第一乙種合格でした。そして、体格のいいものはどんどん戦場へ送り出されていましたが、私は、もともと旋盤工として昭和十年から中島飛行機の工場で働いていたので、戦場へ行くというようなことはありませんでした。最初は荻窪工場で働いていましたが、その後、田無の豊和重工業という、中島飛行機の下請け工場で働きました。昭和十九年ぐらいからは、武蔵境の関東中学（今の聖徳学園中学校）に首都防衛連隊があつて、一ヶ月のうち二十日間は工場で働き、十日間だけ、兵隊としてその連隊へ行っていました。そのころ、敵が上陸してくるのは千葉県から来るだろうということで、首都を守るという名目でこの連隊がありました。

しかし、兵隊といつても、やっていたのは、井の頭の池の周りにある杉の木を伐採でした。今は井の頭公園の池の周りは桜の木に囲まれています。戦時中は杉の木が植わっていて、その木を何百本と伐採しておりました。中島の

工場で亡くなった方のために棺桶用の板が不足していたので、その材料として杉の木を伐採していたのです。

昭和十九年十一月二十四日に最初の空襲がありました。そのときは西のほうからB 29が飛んできました。最初から、工場をねらっているというのは分かりませんでした。我々は、そんなに正確に爆弾が落ちてくるとは思いませんでした。それが二十メートルぐらい離れたところへバタンと落ちました。爆弾が小さかったから助かりましたが、一トン爆弾だったら助かりませんでした。艦載機の機銃掃射もありました。爆弾は一回落としたら終わりですが、艦載機は追っかけてバラバラ、バラバラと、またバラバラと執拗に機銃を打ち続け、空襲よりもこちらのほうが怖かったです。

ある日、夜中に空襲がありました。翌朝、弁当をつくら、武蔵野から田無の工場へ出勤しました。いつもなら、道を曲がったところで工場が見えるのに、この日は道を曲がったら、工場が無くなっていたのです。一晩のうちに、空襲で工場は無くなってしまうました。倉庫が焼け、事務所が焼け、燃えるものがない機械場だけが残ったのです。武蔵野に投下されていたのは、爆弾が中心であったので、被害はそこだけでおさまったのです。焼夷弾だと全部やられていたに違いないと思います。

工場には、油があったにもかかわらず空襲で火が燃え移ることはありませんでした。旋盤作業は油を使わないと仕事にならないのです。それは、旋盤は削るときの熱をとるため、油を使用するのですが、実際に使った油は、鉱物油ではなく、菜種油などのせつけん水のような水溶性の油でした。ただ削るだけのことなので水溶性の油でよかったです。だから焼夷弾が落ちても、機械のほうには燃え移らなかつたのです。逆に、事務所とか、倉庫などにいろいろな木製のものがあるから爆弾が落ちると燃えてしまったのです。旋盤の機械場は燃えるものが少なかったので、被害が小さかつたのです。

空襲のあとで田無の駅前に二カ所不発弾が見つかりました。そこで一つは小金井、もう一つは武蔵境の兵隊が掘って不発弾の処理をすることになりました。爆弾の落ちた穴の大きさは三メートルか四メートルぐらいで、深さは五、六メートルありました。十人がかりで、ある程度掘ったら、今度は鉄の棒を爆弾の潜っているあたりにめがけて差し、爆弾の位置を確かめるのです。爆撃機から投下された爆弾はまっすぐ落ちてきますが、爆発しないと最終的には爆弾の慣性により地中に潜ってしまうのです。爆弾の場所が分かると、今度はやぐらを組んで、滑車をつけ、掘った土をござのような袋に入れて穴から引き上げ、その土を捨

て、穴を掘り進めます。掘る役と、土を引き上げる役とが順番になって進めていくのですが掘る役になったらそれは大変でした。爆弾の先にある信管は地中奥に潜っていて、爆弾はおしりのほうから掘り進めていきます。掘り出した爆弾はその場で、電気を使って爆発させます。この時は二個同時に爆発させようとしたのですが、一回の爆発で一個の爆弾しか爆発できませんでした。そのため、爆発の振動で、せつかく掘った爆弾が再び土に埋もれてしまいました。戦争が終わりに近づくと、中島飛行機は高尾山にある地下壕内の湿気に非常に弱く、機械をきれいに手入れしても、ちよつとでも雨が降ったら、すぐ錆びてしまうのです。だから、機械は使いものになりませんでした。旋盤にしても旋盤にあらずでした。

その頃、戦争が終わるのは近いと感じていました。それは押し入れで隠れて短波ラジオを聞いていたからでした。これは負けた。もういくらやってもだめだと分かっていた。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

私の戦争体験

吉祥寺北町 岡村 千鶴子

桑畑、独活(うど)畑の広がる吉祥寺に戦争が迫ってきたのは、昭和十九年十一月初旬であった。澄み渡った空高くB29が一機、静かに舞っていた。まるで鳶のように輪を描いて南の方角に去って行った。二週間後に大空襲が始まるとは夢想だにしない、のどかな日常であった。

十五歳の私は、夏休み以来、風船爆弾の製造に東京宝塚劇場に動員されていて、たまたまその日はお休みだった。母は国防婦人会の一員で、出征兵士の見送りに忙しくしていた。井戸水をタンクに汲み上げる重労働は私の分担で、手袋を脱ぎながら家に入った頃、空襲警報のサイレンが鳴り響いた。

防空訓練を受けてはいるものの、初めてのサイレンだった。かねて用意の防空壕に転がり込んで外の様子を窺っていると、すさまじい轟音と閃光の雨。母子三人は寄り添って眠れぬ夜を過ごした。翌日、弟と私は母の止める声を背に、昨夜の轟音の結果を尋ねて西へと向かった。なんと家から四本目の青葉小路に一トン爆弾が落ちて、直径十メートルくらいの大穴が掘られて家は吹っ飛んでしまってい

た。その家の主らしき人がバケツを手に放心状態で立っていた。

この日から二日置きくらいの空襲が始まり、爆弾と焼夷弾の雨が夜空を覆った。空襲の形態がだんだん変化して昭和二十年二月頃には艦載機の編隊が多くなり、そのうちの二機が、執拗に屋根の上を目がけてきた。この時、飛行服のメガネの顔がはつきり見えて、恐怖を感じた。空襲が過ぎ、庭を横切る時に機関銃の葉莢が沢山ころがっていた。勿論、弟は庭中を駆け回って拾い集め、「まだ温かい」と騒いでいた。

昭和二十年の冬は寒かった。食料はますます不足して、脱脂大豆を炒ってテニスボール大に油紙でくるみ、お弁当にしていた。その粗末な昼休みを終えた二月中旬、空襲警報解除になって外を見ると大雪だった。それからが大変で、作業は中止してこのまま帰宅するようにと命令が出て、三時頃、帰宅の途に着いた。有楽町から東京までは何事もなく、中央線に乗り換えるとその混雑は凄まじく、二百%くらいの乗車率だったと思う。新宿を過ぎてやつと直立出来るようになったが、今度はノロノロ運転。雪が線路を覆って進めない。何とか中野駅までたどりついた。そこで暫く停車して、またノロノロ、それでも当日中に吉祥寺に着いた。駅から家まで、路肩の雪を拾っては食べ、拾っては食

べながら帰った。この頃には中島飛行機武蔵製作所は壊滅して、吉祥寺目当ての空襲はほとんど終わっていた。母が疲れ果てているのが可哀そうだったが、成す術もなかった。

二月下旬だったと思う。私達の職場である東京宝塚劇場が空襲された。筋向かいの山水楼と帝国ホテルもやられ、地下室から逃げる途中に何人かの死体が転がっていた。時間も覚えていないが、近所の三信ビルの地下に避難して空襲の終わるのを待った。静かになったので、それぞれの帰宅方面グループに分かれ、中央線グループは四谷まで歩き、四谷の駅前で別れた。午後七時に七人くらいの友人と新宿で別れ、中野まで親友と二人で線路上の枕木をつたい歩いた。この日も残雪で、靴も靴下も絞るほどに濡れて、寒さで歯がガチガチと鳴った。電氣の一つもついていない線路上は、黒っぽい人の列が蟻のように連なり、足跡をたどったので歩きやすかった。中野から三鷹車庫に入れる電車が動くとの噂で、線路から上がって深夜のホームに立ってどのくらい待ったか。多勢の人の中は結構暖かく、周りに同じ行動をする人がいる安心感で心もゆるんでいた。午前二時に荻窪、電車はここでエンコして人々はまた線路を歩き始めた。もう歩き慣れた私もその中に入って吉祥寺まで歩いた。やつとたどり着いた家、半泣きで玄関のドアノブを回すと鍵がかかっている。ドアの内側に椅子を置いて母

が眠っていた。私に抱きついて「生きていたの？」を繰り返した。当時は公衆電話はもとより家の電話もなかったの
で、母はラジオで日比谷の空襲を知って諦めていたらしい。
空襲にあつてから十四時間もかかっていた。

先日、非常時訓練の渋谷駅に集まっていらっしゃる人々をテレビで拝見した。現在は線路上に複雑な機器が敷設されていて危険であり、また地震の場合は空襲のように局地的でなく、主要幹線道路を把握する必要を感じた。原宿から富ヶ谷経由井の頭通り、新宿から青梅街道、五日市街道など、新しく市民になられ、土地勘のない人々のために、市報に地図を載せられることをお勧めしたい。尚、停電がもたらす漆黒の闇を歩くことも申し添えたい。

戦争当時の追憶

桜堤 工藤 ハナエ

私の実家は東京都杉並区高円寺にあります。キーパンチャ―として五年間勤務しました東京丸の内にありました帝国生命保険会社（現在の朝日生命）を昭和十八年二月に退職致しました。当時は荻窪より新宿まで都電が通り三越は日本橋の本店だけでした。新宿の伊勢丹の地下はアイススケート場、又現在の歌舞伎町は中華街でした。

同年、私は北支より復員してきました亡き夫（平成八年八十一歳で他界）と中央線東中野にある日本閣に於いて結婚式をあげ、昭和十九年現在の所に新居をかまえました。地名は東京都北多摩郡武蔵野町境千八百二十三番地、家屋は木造平屋建ての二軒長屋で二百余世帯ありました。旧中島飛行機製作所の社宅でしたが、終戦のあと各自の所有となりました。土地の広さは大体一世帯あたり三十坪、四十坪が大半です。農家の青々とした畑、雑木林に飛んでくる小鳥のさえずり、上水の清らかな水の流れるに足をぬらしながら、めだかなど取った事すべてが懐かしく思い出されます。主人との平和で楽しかった新婚時代、三人の男の子に恵まれ、子育ての親子の愛等すべてが幸せそのものでした。

しかし、世情は想像のつかない程大変な時代でした。それは第二次世界大戦が行われていた昭和十九年のことです。すべてが配給になり、お米は、現在武蔵境にあるUFJ銀行のあたりまで、大八車で隣組の方々と徒歩で僅かな量をいただきに行き、足りない時は大豆等で我慢していました。長男が生まれた昭和十九年、私は母乳で子供を育てましたが、母乳の出ない方、又足りない方は当時の役場で証明書を戴きミルク等買っていました。又農家に品物等持って行き野菜等を補いました。いわゆる物々交換です。衣類等も衣料切符が配布され、それがなければ購入できませんでした。私達母親は自分の浴衣をおむつにして子供を育てました。

戦後、子供達は、三年生までは武蔵野第二中学校の教室で勉強し、四年生になると武蔵境の第二小学校まで歩いて通学しました。四十五分位かかったでしょうか。晴れた日はよいのですが、雨の日等はぬかるみの泥んこ道で大変でした。

給食、ランドセル、雨合羽（レインコート）等勿論ありませんでした。私達PTAの会合はいつも夜で、うす暗い道を語り合いながら行きました。今でも武蔵高校の銀杏林は想い出の一つです。アメリカ空軍の飛行機B 29から現在の武蔵野中央公園（旧中島飛行機製作所跡）へ空襲警報発令と共に、キラキラした光を発しながら、寸分間違いなく落とされた焼夷弾、それらは今でもはっきりと記憶に残っています。八十

歳の老女、当時を語りあう方々が少なくなり残念です。イラク、北朝鮮等大変な世の中ですが、全世界が平和である様祈って止みません。最後に尊い命をなくされた方々の御冥福を心よりお祈り致します。

人生も 山あり 谷あり いばら道

強く生きよう 幸せつかんで



中島飛行機武蔵製作所 時計台跡
(昭和 26 年 7 月 撮影:中村正英氏)

十四歳の学徒動員

緑町 沢辺 松美

私は、武蔵野女子学院高等女学校二年生の一九四四年十一月に、母校の近くの中島飛行機製作所へ動員され、旋盤の使い方などの訓練期間を経てそれぞれの部署へ配属されました。私は給与課というところで算盤を使って社員の給料を計算したりしましたが、殆ど訓練もなかったので、たびたび間違えて課長さんに叱られたりしました。

アメリカ軍による工場への空襲は、日を追って激しくなり、空襲警報のサイレンが鳴ると、工場の中にある防空壕だけでは避難できないので、近くの母校の防空壕まで走っていくことになっていました。爆撃機のB 29は、青い空の中を南のほうから隊列を組んでキラキラ光りながら、まるでトンボが舞っているように美しくさえ見えた中、爆弾の雨を降らせたのでした。私たちはそれを見て逃げながら余りにも美しい空の色と現実のことが一致しなくて、まだ「死」の恐怖さえ分からない幼い年齢でした。今にして思えば残酷な体験だったと思います。

十二月三日の空襲で母校のテニスコートにあった防空壕に直撃弾が落ちて、そこに避難していた五年生の四人の方が

亡くなりました。そのなかの一人は同級生のお姉様でした。

その後、艦載機の波状攻撃が毎日のように続き、工場は壊滅状態になりました。私たちは浅川の分室や、小金井の工業高校の工場に分散して働くようになりました。そのころには、半数くらいが生徒が疎開でそれぞれ知り合いのいる地方にいくことになり、私も岐阜に嫁いだ姉のところに疎開しましたが、義兄の勤める工場も軍需工場で危険になったので、しばらくしてまた東京に戻り終戦を迎えました。

二〇〇七年六月、私たちは、喜寿を祝う記念クラス会を母校で行いました。三十名の参加者はおなじ職場で働いていて犠牲になった四人の先輩を偲んで建てられた「散華乙女（さんげおとめ）の碑」のまえに献花をして、戦後私たちはこんなに長く平和な生活を享受しているのに、素晴らしい青春を送ることなく、たった十七歳で天国に行ってしまった先輩の無念を思い、戦争の悲惨さをつくづく話し合いました。

亡くなった先輩達の同期生は「散華乙女の碑」という立派な思い出集を作り、その下の先輩達は「戦争って何？」というやはり体験集の冊子をつくり、私たちは余りに幼くて記憶があやふやなために、大変遅れてこの喜寿の記念クラス会に「十四歳の学徒動員」という数人の思い出集の冊子を作りました。

これらはすべて戦争の悲惨さを後の人たちに伝えるため



沢辺さんの同級生の竹下さん(旧姓)が十四歳で
中島の工場へ動員された時の写真

と、こんな体験をした武蔵野女子学院にある「散華乙女の碑」
を忘れないでいて欲しいという気持ちを持っていましたが、
幸い母校の大変熱心な社会科の先生がこれらの資料を教材
に使用して平和教育をされていることを聞き、大変嬉しくまた
心強く思います。

そして何の偶然か、生死をわけた時代を送ったおなじ場所
(中島飛行機の跡地)に、晩年を送ることになった私は、こ
の平和な時代がずっと続くよう祈るとともに、この体験を多
くの人に知っていただき、後の子供達、孫達に引き継いでい
ただきたいと願っております。



武蔵野大学構内にある
「散華乙女の碑」と
白い花を咲かせる
「わびすけ椿」

戦時中の吉祥寺

吉祥寺東町 芦川 真純

私は昭和七年一月生まれで七十七歳、この地で生まれ、以来七年間の地方暮らしを除き、すべてこの東町二丁目の同じ場所で過ごしてきた生粋の吉祥寺人です。

1 戦前と戦後の家並みの変貌ぶり

まず、戦争中の記憶を記す前に我が家の周辺が戦争を境にどのように変貌したか、是非話しておかなければなりません。

吉祥寺東町の一角に住居が立ち始めたのは昭和を迎えてから、我が家も昭和五年（一九三〇）に建築されました。当時の家屋はどこも一区画二百坪から四百坪の敷地を持ち、庭を広くとった広い日本家屋でした。お屋敷の中には堂々と背の高い赤松の古木がそびえ、松籟（しょうらい）の音も爽やかにノンビリとした風情があったものです。空き地も十分残っており、そこには「ほうき草」「桑」「うど」等の畠や雑木林が広がっておりました。各敷地には必ず一本は申し合わせたようにソメイヨシノを植え、どの敷地も綺麗に剪定された生垣で区切られていました。このあ

たりは戦争で空襲にこそあわなかったものの、戦後住民は広い邸宅を持ちこたえられなくなり、ミニ開発が進んで一区画が五〜六区分に分筆され、小規模な家が立ち並び、住宅やアパートが詰まった区域に様変わりしたことはとても残念です。戦争の残した大きな影響とっております。

2 戦時中のコミュニティ

戦前のある時期から戦争中にかけて隣組、町内会という組織があり見事な連携をしておりました。「銃後の守り」という標語のもとに地域の団結力が図られたのです。町内会はほぼ十五戸世帯単位で構成する隣組に分かれ、各隣組は回覧板という情報伝達内容を書いた紙をバインダーに挟み、毎日のように隣から隣へ廻していました。又、隣組では当番制で「常会」を開き、主に上からの指令の伝達や防空演習の打ち合わせ等を行いました。どの家にも掘ってあった防空壕を時には共同使用できるように話し合ったりして空襲に備えました。そこにあつたのは助け合いの精神です。これら隣組を束ねるのが町内会でした。

我が家の属するのは、西、東の十一小路を含めた三本の十一小路を統括する町内会で確か「吉祥寺第二町会」とい、時折、全体集会を巴幼稚園（今の0123吉祥寺）で実施しました。全世帯に呼び出しがかかり全員整列して

「訓辞」を聞くといったものでした。そのほか、血液型の検査もしましたし（これを胸の名札に添えて書いていた）、空襲に備えバケツリレー等の訓練もしました。我が家の隣組にはアルベルトホームという宣教師の宿舎があり、ドイツ人が住んでおられました。彼らも協力的で妙なアクセントの日本語でメガホンを使い空襲警報の発令を告げて回っていたのをよく覚えています。

3 空襲の模様

武蔵野町には現在の緑町二、三丁目及び八幡町一、二丁目をかバーする広い地域に中島飛行機武蔵製作所のエンジン工場があつて、米軍の東京空襲は先ずこれを攻撃、つまり我々の地元武蔵野から始まったのです。昭和十九年の暮れには、米軍のB 29爆撃機が上空高くから五機ぐらいつつ編隊をなし、独特のうなりを立てて侵入してきました。

四月頃から夜間空襲となり、爆撃の前に必ず落下傘につけた照明弾を何発も、時には一度に十発も、それはそれはゆっくりと落ちてゆくのです。工場が明るく照らし出され、目標が鮮明になったところで大型爆弾を落とし炸裂させる手を使っていました。この照明弾が夜空を赤く染め、不謹慎でしたがまだ子供だった私にはまるで今のイルミネーションを見るように素敵に映りました。空襲警報が鳴つ

たら防空壕に必ず退避しなければならなかったのに好奇心からそつと抜け出して世にも珍しい光景を見たのでした。

一方、昼間には突然の空襲警報のサイレンが鳴り止まない間にもグラマン戦闘機がいきなり低空で現れ、地上の標的に向かつて機銃掃射をしました。パイロットが肉眼でよく見えました。きつと電車を狙ったのでしよう。

中島への爆弾攻撃はその後も続き、幸い東町界隈は何の被害もありませんでしたが、北町や善福寺付近に大きな爆弾（それだま）が落ち、直接被害を受けた人がいたり、ガラスが壊される等恐い目にあつた人もおられたようです。

敵機めがけて打った高射砲が上空で炸裂しこれが破片となって落ちてきて当たり、怪我をされた方もおられました。たしか、高射砲陣地は今の松庵交差点、三浦屋の筋向いに高い塀に囲まれてあつたように記憶しております。

昭和二十年になると、本格的都市への焼夷弾攻撃が始まり、例の三月十日の東京大空襲の時は屋根に上がって見たのですが、東の空が異様に赤く染まっていました。以前訪れた日本橋界隈はどうなっているか、浅草は、銀座はどうかなどと想像しているうちにこの空襲には怒りを覚えてきたことをはっきり思い出します。

私たちの家族は空襲を避けて、昭和二十年五月に「縁故

疎開」で家族全員地方に疎開しました。このように縁故疎開をした家族も多かったようです。東京二十三区内の小学校―当時国民学校といった―は学校ごと子供だけで地方に強制疎開をさせられました。が、武蔵野町には適用されず、疎開する先は知り合いとか故郷とかに向う「縁故疎開」でした。かくして疎開した山形県の中学校で終戦の詔勅を聞くこととなりました。

4 余話―吉祥寺駅界限と「中島北裏」

戦前も中央線を西へ向って吉祥寺駅までは線路際(高架になってない地上の線路)までほぼ、家屋が連続して建っていました。そこで駅の近くの線路に沿った家屋・商店等は五十メートルほどの幅ぐらいが、強制撤去ということになり、結局駅だけが残った格好になりました(当時は貨物駅もありました)。中島飛行機武蔵製作所の工員は、吉祥寺駅からバスで向かっていた人が多く、また南口方面にも三鷹町に軍需工場が多くあり乗降客でいつもごった返していました。当時、三鷹の駅は特に北口は出来たばかりで、今のように南口からのバス系統も少なく利便性がなかったようです。

このため電車が着くと一本しかない細い階段や跨線橋は、毎朝一步も進めないほどに混雑して、中学に通う私た

ちは押しつぶされそうになっていました。駅周辺に材木が積まれ、うわさもあって駅の改良工事が始まるとばかり思っていたのですが、戦況とともに沙汰やみになったようです。

中島飛行機製作所に向う工員が乗っていったのは「中島北裏」行の定期バスでした。輸送力が足りず五日市街道から専用バスも出ていました。「中島北裏」とは工場の北の方を指した仮の造語と思いますが、「北裏」のバス停の名は今、青梅街道沿いにその名をとどめています。本来練馬区にはもともと北裏という地名はなく、いつの間にか武蔵野市から練馬区に移ってしまっています。が、往時の名残であることは明らかです。このほかにも、安易に「北裏」の名が用いられており、例えば市営プール脇から吉祥寺通りまでの新道も「北裏通り」といっています。

今、その起源が「中島飛行機武蔵製作所」にあることを知っている人は少ないと思います。

武蔵野空襲の思い出

東村山市 田中 克明

武蔵野空襲の当時、私は中島飛行機武蔵製作所から一キロ程離れた、五日市街道柳橋交差点の側に住んでいました。

連日空襲警報のサイレンの音を聞いて自宅の防空壕へ避難していましたが、壕の中においても米軍機のキーンという金属とドカン、ドカンという爆弾のすさまじい破裂音、そして地響き、それはまるで雷と地震が同時に来た感じでした。連続する爆破音を聞いていると今度は自分達のいる防空壕に爆弾が落ちてくるのではないかとドキドキ、ヒヤヒヤしており、外に出た時はおそらく家が無くなっているのではと思う程はげしい空爆でした。

そういう壕の中でも母親はいつも日本が戦争に勝てば何んでも好きな事が出来るし、何でも旨い物が食べられるからそれまで、我慢するのだと励ましてくれましたが、しかしこんなに酷くやられてはそれ迄生きていられるかどうかと考えると、全く不安でたまらなく一日も早くこの空襲がなくなつてほしいと思いました。

最も恐ろしかったのは米軍の小型艦載機による機銃掃射でした。突然の空襲で逃げ場を失った通行人が我が家の庭に

数人駆け込んで来ました。ウロウロしている人達に母が防空壕に入る様に促すとすぐに米軍機の発射した銃弾が我が家のトタン屋根を貫通し、前の家の壁に三発当て直径十五センチ位の中をあけて去って行きましたが、今でもその跡が残っています。その時はかなりの低空飛行でパイロットの姿が見えるほどでした。他の通行中の人は千川上水の柳橋の下へ避難し全身水浸しになって出て来ました。

暫くすると中島飛行機武蔵製作所で爆撃を受け負傷した人が担架に乗せられ近くの病院へ運ばれて来ました。担架を担いでいる四人の人は常にしつかりしろ、しつかりしろと声をかけ続けていました。

その様子からかなりの重傷と思われ、ぞつとした寒気を感じました。私が元中島飛行機であった富士重工三鷹製作所に入社した当時の先輩の話によると、工場の地下から伝令のため外に出た人達が皆やられたという事でした。

この様に空襲が酷くなると、夜中でもすぐ逃げられる様に防空頭巾を枕元に置き靴を履いて寝ました。

近所の人は田舎に疎開しましたが、私は田舎が無いので友達や誰もいなくなった中、毎日近くの海軍の兵舎に遊びに行っていました。

兵舎は有刺鉄線で囲まれて中には入れませんでした。外で訓練を見たり、高射砲陣地で引金を一人一人引く様子を見

学したりしていましたが、その高射砲陣地に爆弾が落ち何人かの兵士が生き埋めになってしまいました。

その場所には戦後も塔婆と花が暫く添えられていました。戦況がきびしくなるにつれ近所の人が次々と出征して行き、ついに従兄も出征しました。

日の丸や軍旗の小旗を持って武蔵境の駅まで送って行きました。出征兵士を送るといふ事は映画やテレビで見る様なものと違い、戦場に向う従兄が電車の窓から小旗を振ると見送りの人はいきなり狂った様に声を張上げ、見えなくなるまでバンザイを繰返していました。

その異様な雰囲気以身振いを感じると同時に、戦争に行くという事はこういう事なのだとつくづく感じました。

それから間もなく八月十五日の終戦の日を迎え、近所の人が集まって縁台に座り玉音放送を聞きました。

大人は皆むずかしい顔をしていましたが、その夜は灯火管制も解除され明るい電灯が付けられ、ゆつたりとした気持ちと嬉しさが込み上げて来ました。



中島飛行機武蔵製作所の廃墟

(昭和26年7月 撮影:中村正英氏)

私の戦争体験

境南町 佐野 和生

私が府中にある中学校に入学したのは、昭和十九年四月であった。三人の姉たちは学徒動員に従事していた。

中学校には、陸軍の配属将校がいて軍事教練を受けさせられた。お手玉の四倍程度の小石を入れた布袋を片手に持ち、三十メートルほど匍匐前進をした後に起き上がり、全力疾走を二十メートルほどしてから、小石の入った模擬手榴弾を投げる練習を、何度もさせられた。これは敵軍に対する肉弾戦の練習である。

中島飛行機の武蔵製作所に対する爆撃は十一月二十四日に始まり、次第にB 29爆撃機の空襲が激しくなってきた。家の近くには高射砲陣地（現武蔵野赤十字病院敷地）があり、昼は明るいために分からないが、夜間空襲の際には一瞬雷光のような青白い閃光が走り、その後発射音が聞こえてきた。B 29は中央線上を飛んでくるため、空中戦での薬莖などが、高射砲弾の破片とともに、屋根瓦に落ち屋根に穴が絶えず開いた。

雪が降ると、学校に連絡があつて、近くの調布飛行場の滑走路の雪かきに動員され除雪作業を度々行った。あると

き飛燕戦闘機が数機編隊で、朝、硫黄島に出撃していったが、夕方までに一機も帰還しないこともあった。

二十年三月十日の東京大空襲の時には、B 29は巨大な機影の編隊で東京のほうにひっきりなしに飛んで行った。東の空は夕焼け時のように朝まで一面明るかった。このとき何故か高射砲の発射音は聞かなかった。翌日には高円寺から東が一望丸焼けになったことを知った。

学校の帰り道に空襲警報が出て、国分寺の坂のあたりに来ると、空中戦でB 29に戦闘機が体当たりをして墜した。その墜落していく様を追いながら小平の墜落現場にまで行ったことがある。

中学二年になると、府中の東芝の工場に学徒動員された。工場では特殊潜航艇の電流遮断機を作らされたが、製品合格率は四十％程度で、海軍の検査官に何時も叱られていた。

工場ではムスタングP 51戦闘機の機銃掃射を受けた。空襲下の帰り道に多磨墓地近くでP 51による機銃掃射を受けた。操縦士の顔も見え、横に逃げたため難を避けられた。調布飛行場間近なため引き返してはこなかった。境の浄水場も爆撃されたが、幸いに二百五十キロの不発弾であつた。境駅も電車ごと銃撃されたが、柱に弾痕があり、駅舎が建て替えられるまでは残っていた。

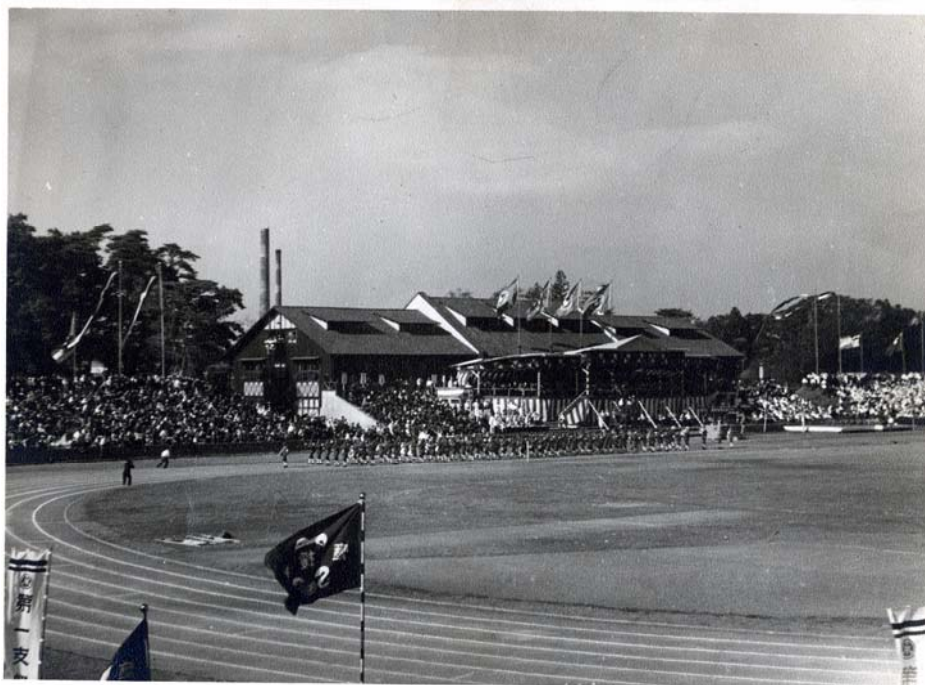
近くでの空襲では、中島飛行機の三鷹中央研究所に、夜、「モロトフのパン籠」といわれる焼夷弾が、明かりを灯したような状態で落ちていくのが見られた。被害は無かったようである。

九十九里浜の国土防衛の部隊移動のために、陸軍兵士たちの分散宿泊所として家を軍に提供させられたこともしばしばであった。

食事については物がなく、サツマイモの葉柄やヒメジオンや、大根の細かく刻んだものが半分以上のご飯などを食べた。ジャガイモ、サツマイモ、カボチャなどは主食代わりの大事な物であった。

終戦は学校でラジオで聞かされたが、ほとんど聞き取れなかった。

様々なことがあったが、今は遠い思い出になってしまった。



昭和 16～17 年頃の中島飛行機グラウンド(現:武蔵野陸上競技場)の運動会風景
サイパン陥落までは、年に一度は大運動会がおこなわれていたといわれている。
(提供:木藤助四郎氏)

幼い日の記憶——吉祥寺で体験したこと

西宮市 富田 泰子

武蔵野に住む友人が、私の吉祥寺での被災体験を投稿することを勧めたとき、それは遠い記憶で、果たして正確に当時のことを伝えられるか、と、やや不安だったのだが、記憶というものは、たとえ薄れなくても日々少しずつ正確を欠いてゆくものであることを痛感していた私は、この機会に文字にしてみようか、と心が動いたのだった。

両親が五歳年上の姉と乳飲み子の私を連れて、三重県飯南郡（現在の松阪市）から東京に出てきたのは、昭和十三年頃であった。大森の馬込に数年暮らしたあと、昭和十七年に父は今の吉祥寺北町に土地を買い、家を建て、四人で移り住んだ。当時は武蔵野町吉祥寺といい、まだ草地などがあちこちに残っていた。

さして広いとはいえないが庭のついた二階建ての家。画家であつた父としては、アトリエまで配した初めての自分の家を持つて幸せいっぱいだったと思う。姉は近所の第四小学校に転入、私はすみれ幼稚園に入園した。八月には妹が生まれて五人家族となり、近所とのおつきあいも楽しく、穏やかな毎日だった。

昭和十八年四月、裏門に徒歩十数分の成蹊学園の初等部に入

学。毎日ハンカチを忘れたと言つてはランドセルを揺らしながら走って取りに戻つた自分の姿を覚えてる。受け持ちの吉田虎彦先生には二年近くお世話になった。

昭和二十年一月九日、警戒警報のサイレンが鳴つて私は走つて学校から家に戻つた。お昼頃だったろうか。間もなく、間隔の短い急を知らせる空襲警報が、冷たい空気を劈くように鳴りだし、母と妹と三人で庭の片隅に掘られた防空壕に入った。この日たまたま父は秩父に住む親戚の家に向かっていた。この頃学校でも集団疎開の話が出ていて、それへの参加を決める前に私を預かってもらうことを頼みに出かけたのである。姉は前年入学した武蔵野高等女学校に行つていてまだ帰つてきていなかった。

防空壕は父が知り合いの人に作ってもらつた簡単なもので、家族五人がやっと入れるくらいの大きさ、頭上に廃材の戸を渡して土で覆つてあつた。赤ん坊であつた妹を抱いた母と私は向かい合つて座つた。飛行機の低空飛行の音のあと、大きな独楽がくるくるまわるような鋭い音が数秒間続いたと思つた途端、一瞬のうちに壕は真つ暗になった。恐ろしい静寂が訪れ、私は闇の中で遠くに女の人の叫び声を聞いた。朦朧とする頭の中には、大きなメリーゴーラウンドが見え、ベティーさんの大きな顔が回つていた。

気がついたときは道の上に寝かされていた。家の近くなのに、

何処か知らない地であるようにも感じた。夕闇が迫っていた。誰かがコートを身体に掛けてくれていた。何人かの顔が上から見下ろしていた。学校から帰ってきた姉やその友人たちがいたようだったが記憶は朧気である。男の人が「土をたくさん吐いたよ、でももう大丈夫。」と話してくれた。後で聞くと、生き埋めになって四十分ほど助け出された、とのことだった。土の中で聞いた女の人の声はすぐ近くにいた母の声だったこともあとでわかった。私たちを掘り出してくれたのは近所の人たちだった。

父は当時近所の何軒かの世話をする「組長」をしており、ほんの数日前に、組の人たちを連れて各家の防空壕の位置を確認するために回ったという。武蔵野上空にも米軍機がやってくるようになり危険を感じたのであろうが、見事にそれが役に立ったのだった。この日家の庭の大きな桜の木の根元に落ちた爆弾は「中島飛行機」を狙ったもの、という噂を後で聞いたが、この日の爆弾は我が家だけでなく近所にも落ちたとのことだった。次の私の記憶は翌日のことである。家は真半分に切り取られて、中にあった部屋を隔てる壁が諸に見えて異様だった。庭にあった鶏小屋には住人の二羽の鶏の姿はなく、彼らの羽毛が金網に引っかかって風に揺れていた。子供の目にも、寂しい光景だった。

数日後、地域の新聞に私の被災の記事が出た。防空壕に、素

焼きで作られ布の洋服を着せたお人形を抱いて入ったことを、取材に来た記者に話したのだろう。人形の顔と私の顔の間に空気が入る隙間ができ、辛うじて息ができて助かった、という内容だった。救われたのは私で人形ではないのに、何故か見出しは「救われたお人形」だった。父は切り抜きをスクラップブックに納め、私は何度も見せてもらったが、今は父も母も故人となってその在りかはわからない。人形はそれから私たち一家が移り住んだ父の実家の縁側で、数ヶ月して何の前触れもなく突然割れた。やっぱり身代りになったんだよ、と誰もが言った。

吉祥寺の土地には、四半世紀を過ぎて妹一家が家を建て住んでいる。平成八年に建て替えをしたとき更に深く地面を掘ったら土の色が変わっていて爆弾のあとがあったそうだった。

旧制都立六中第20回生・勤労学徒動員の記録

調布市 安達 祝伍

都立第六中学校四年生のABC組（約百五十人）は横河電機へ、DEF組（約百五十五人）は中島飛行機武蔵製作所へ、昭和十九年七月に動員された。私、安達祝伍は中島飛行機組で、青年学校で職場の状況や就業上の注意等の教育を受け、適性検査終了後に現場に配置された。

私は旋盤工として鋳物工場から運ばれて来た配油盤（エンジン）の中心部にあつて、各シリンダーに潤滑油を配給する部品）の最初の荒削りを担当した。（別図・A）

昭和十九年十一月二十四日、昼前、「空襲だ！避難しろ。」という声で取るものもとらずに地下道入り口（別図B）から降りて西に向かい、所定の退避場所に行き、同級生と並んで座っていた。（別図・C）この場所は食堂の東側にあつた地下道入り口（別図・D）から東寄りで、防火壁（地下道幅の半分くらい突き出ている、厚さ四十センチくらい、高さ一メートル三十センチくらい）の木製で、中に土が詰まつていたように記憶している）が設置された、二番目の壁のそばだった。

退避して間もなく、担架に乗せられた人が二人、目の前

を西に向かつて行った。爆弾でやられた人だとは思わなかつたので、怪我をするほど慌てて逃げた人がいると同級生と話したが、既にその時には爆弾が落ちていたのだった。（別図・E）

しばらくすると、ドドーンという音と共に、目の前を真っ赤な炎が西から東へ走った。とっさに私は前掛（油よけに母が作ってくれたものをつけたまま退避していた）を頭から被つてうずくまった。周りの人は立ち上がったようだった。何がなんだかわからないうちに、人波に押されて真っ暗な中を東に歩いていった。

地下道の北側の壁にパイプやケーブルが張られていたが、その止め金具に押しつけられて上衣の左側が破れた。痛かつたがそれどころではなく流された。地上に出る階段（別図・B）は、両側から来た人々で、我先にと押し合つてなかなか上れない。大人が大声で叫んだ。「慌てるな！日本人じゃないか！」

この焼夷爆弾は地下道の入り口（別図・D）から飛び込んで、地下道内で爆発したものだつた。

地上に出たら、工場内の広場に円形の土嚢を積んだ所（別図・F）があつた（高さ七十センチくらい、直径十メートルくらい）ので、その中に入った。みんな顔がすすだらけで、誰だかわからないほどだった。私は、前掛けを頭か

ら被っていたおかげで、顔は何ともなかった。

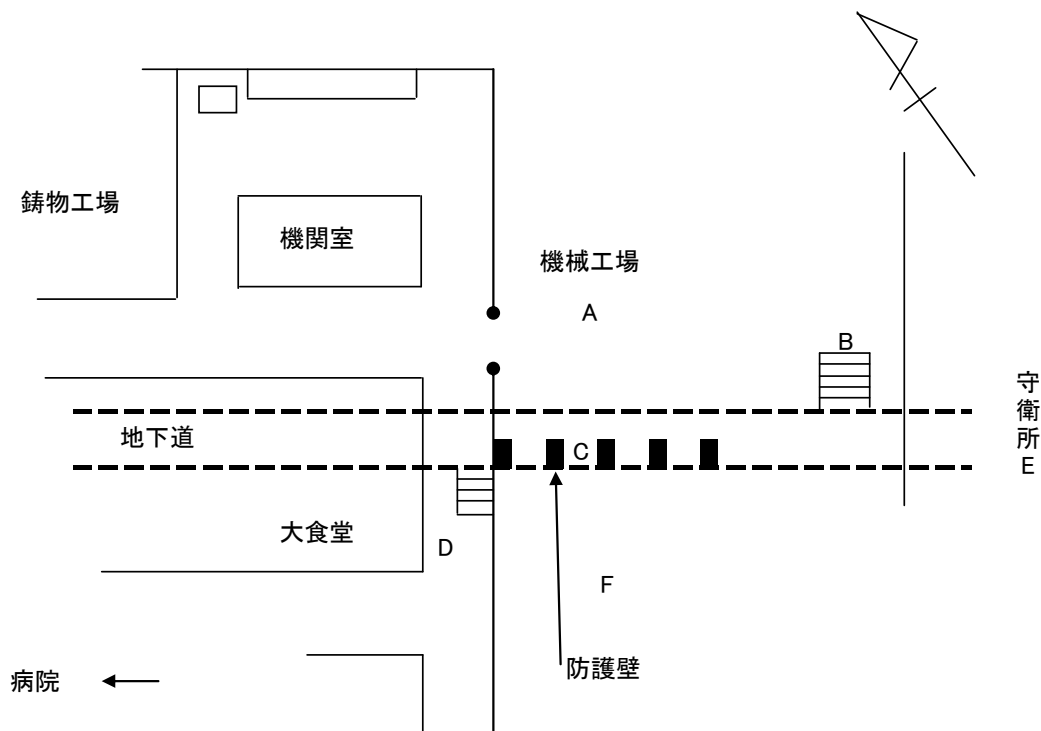
陸軍中尉の軍人が来て、「ここは危ないから工場の外に逃げろ。」と言われたので、すぐ成蹊学園の方に走って行って、畑の中でうろろうろしていた。

同級生は顔が赤黒く、痛いから病院へ行くと行って土囊（別図・F）の所で別れた。

午後四時頃（確かではない）工場に帰り、同級生がどうしているか心配だったので、地下道を通って病院に行った。病院の入り口の地下道には、死体や負傷者が両側に並べられていて悲惨この上もない状況だった。（三十人〜四十人いたように思う）

頭と頭の間が六十センチくらいのを歩いたら、突然、右足首をつかまれて動けなくなった。「水をくれ！水をくれ！」と言って離さない。見ると、左眼球が飛び出していて右目は真っ赤だった。「水を持って来るから。」と耳元で言ったら離してくれた。死体の頭と頭の間を通り抜けて病院に入ると、大混乱で同級生のことなど答えてくれる人はいなかった。

顔面のやけどなどで休学した者は出たが、死んだ者はいなかった。



別図：工場の地下道の略図。地下道には幅半分ぐらいまで防護壁があり、空襲の時、安達さんはこの防護壁のそばに居たので、地下道を吹き向けた爆風より身を守ることができた。

武二小の頃

境南町 並木 清

私は皇紀二千六百年（昭和十五年）の華々しい年に武蔵野第二尋常小学校松組に入学し受持は、五十嵐先生でした。住宅も境は疎らでそこそこには雑木林があり、私達子供はダンゴ山、モミジ山などと呼んだ楽しい遊び場でした。小学校に入学して二年目の十二月八日の朝登校するときは上級生数人のグループがおり、その一人の四年生が、「戦争が始まった」と話していたが二年生の私には全く分かりませんでした。

学校では運動会に使う拡声器から大音響で「軍艦マーチ」と「海行かば」の音楽が流されていて、繰返し臨時ニュースが流されていました。

これが、大東亜戦争が始まった知らせでした。小学校が国民学校と呼び方も変り、読本の表紙も変わったのを記憶しています。

五年生の十月のある日、昼会で運動場で全校児童の体操をしていた時に、西の空から白い雲を引きながら東に向かって飛んで行くものを見付けました。上空を見ていて先生に怒鳴られたのを覚えています。間もなく、突然空襲警報と

なり、前回の昭和十七年四月の登校時の空襲に次いで二度目の大きな空襲だったと記憶しています。

それから一カ月が過ぎた頃、関前と西窪にあった中島飛行機の武蔵製作所が爆撃され、一回で壊滅しました。

新聞では「盲爆」とされていましたが、八千メートルの上空で高射砲の届かない所から落とす爆弾の正確さには、子供心でも驚きました。帝都防衛基地の一つ調布飛行場から飛び立った垂直尾翼が赤い戦闘機は、上空から一撃しましたが、再び応戦するために上空へ戻る力はありませんでした。B 29は片側のエンジンが停止し燃料を白煙の様に洩しながらも、東に悠々と飛び去って行きました。

関前の爆撃の際に防空壕で生埋めになった事を知り、それ以降の空襲時には電球を消してじっと布団の中でラジオの東部軍管区情報に耳をかたむけていました。

十九年十二月三日の日中の空襲時に初めてB 29は比較的低空からやって来ました。三機編隊に近づいた日本の三式戦闘機「飛燕」はアツと言う間に主翼附近から発火し眼前で墜落させられたのを、涙しながら見ました。この日は末の妹の満一歳の誕生日の出来事でした。一年前に北九州が爆撃されたことを遠くの出来事のように思っていましたのに、眼前で友軍機が打ち落とされたの

を見て、大変ショックでした。

年が明けると艦載機グラマンF6Fの優秀さも見せつけられる様になり、更に昭和二十年四月三日の夜は灯火管制の無意味さをイヤと思うほど、真昼の様な明るい照明弾に照らされました。その頃、警戒警報で下級生を纏めて家に帰していましたが、やがて登校せずに少年団単位の班学習に変わり、そのうち、私は母の田舎のある福島へ疎開しました。そして、山の中にいたので、終戦のラジオ放送も聞くこともなく、戦争は終りました。

私達と同年輩は、小川に設置された防火用水で泳ぎ遊びをよくしたのですが、今の境南には水の流れていた跡は残されていません。モミジ山の防火用水池は素掘りでドロ水でしたが、モミジの木から飛び込んだり、ザリガニ釣りを楽しんだ時期も戦後十年位ありました。日赤病院用地の万年塀の内側が高射砲陣地だったので米軍が暫らく進駐していました。境は爆撃による大きな被害は殆ど無い中で、武蔵境駅前北側の渡辺自転車店の前に友軍機が墜落炎上する大事故がありました。が、そういうことを知る人も今では数少なくなっていました。

人が人を殺す戦争、絶対に避けるべきです。この世に聖戦なんてモノは有りませんよね。今では境一帯にあった小

川も林も畑も消え、家ばかりが目立っています。このことを忘れないで後世の人に平和の大切さを伝えていただきたいと思います。



中島飛行機武蔵製作所跡とグリーンパーク球場引き込み線
(昭和27年 撮影:齋藤 充氏)

中島飛行機 武蔵製作所での体験

国分寺市 山田 喜美江

私は、大正十三年生まれで、吉祥寺に住んでいました。家は、駅前通りの中ほどで光陽館書店と言う本屋をしていました。成蹊学園の専属で教科書などを納めていました。

通っていた小学校は武蔵野第三小学校です。第三小学校ができたときの一年生でした。その後、体操の先生になると藤村高女を出たのですが、途中で考えを変え、栄養士になろうと、駒込の香川栄養学園という学校に行きました。そしてお国のためにお役に立ちたいと思い、卒業してすぐ中島飛行機に栄養士として勤めたのです。家が中島と本の取引があり、そこの方をお願いして栄養士として入れていただきました。香川栄養学園からは三人勤めました。

五日市街道も当時は車は少なく、自転車為主でした。五日市街道から中島の正門へ行き、私たちは正門の横のところから入りました。そこから真っ直ぐ奥のほうへ行行って、左寄りの半地下みたいところに厨房がありました。厨房はすごく広く、お釜も電気で回転するようになっていました。勤務は、朝早く行くときは午後四時ぐらいまでには、帰れるし、午後行くときとちよつと夜遅くまで働くというよう

でした。出来たものは、別のグループが食堂へ運んでいました。ご飯は、食べられることができればよいという頃なので、白米だけでなく、いろんなものをまぜた御飯でした。お弁当は持っていかず、調理したものを立って食べたと思います。給料はもらったのでしようが、いくらだったか覚えていません。給料は父に渡していた気がします。

最初の空襲の日（十一月二十四日）の空襲警報があったときは、退避なんて言われなくて、急に来ました。空襲警報のサイレンが鳴ると、初めのうちは正門から逃げました。北裏方面へ出る小さい門があり、そこから東伏見のほうへ逃げました。B 29は南の方から来るものですから、北の方へ逃げたほうが良いだろうと思っていました。ところが、爆弾が落ちる率は北に落ちるほうが多いのです。それで、今度は三鷹のほうへ逃げるようになりました。空襲警報が鳴ると、自転車を引つ張り出して、ちようどB 29が編隊で来るところの下をかいくぐって三鷹の方へ逃げました。戻ってくると、人が倒れているのを、何人か見ましたけど、自分の職場へ戻る気持ちが強くと、助けることができなりました。倒れている人は爆風で倒れたのか、傷はなかつたです。今、考えると亡くなっていたのではないかと思えます。

空襲がひどくなったところは、多くの人が倒れていました。私は、逃げるのが精一杯で助けることができませんでした。みんなと一緒に逃げることはなく、自分だけで自転車で逃げました。腕時計を持っていませんでしたので、よくわかりませんが、二時間ぐらいで「ウー」とサイレンが鳴り空襲警報が解除されると、厨房に戻りました。空襲警報がでると、「ウー」とサイレンが鳴り、警報解除のときも鳴るのです。小さな飛行機による機銃掃射のときは、倒れている人はあまり見なかった気がします。しかし、大きい飛行機のときは多くの人が倒れていました。いずれ自分もそうなる運命ではないかと思っていました。必死になって逃げ、三鷹の踏切を渡り、南へ逃げると、何となくほっとした気持ちになりました。働いていた厨房は、最後にやられました。中がめちやめちやになりました。

働きに行っても、度重なる空襲で中島がやられてしまい、仕事にならなくなってしまうので、疎開先へ行くことを決め、中島を辞めました。会社から辞めてくれということではなく、自分から行かれなくなったので辞めた感じでした。

その頃の本屋の商売は店を開いても、本がなかなか届きません。横とじでグリーンの表紙でできた週報というのが届いたときは、よく売れました。長女の私には、年が六つ

離れた妹がいて、その下にも、年子のように兄弟が続いていました。武蔵野にいたら危ないということで、親戚を頼って山梨の長坂にあるカキダイラというところへ疎開しました。

終戦放送は、疎開先で聞きました。天皇陛下のお言葉があるとのこと、みんなで正座して聞いていました。しかし、何と言っているのか聞き取れません。祖母たちは意味がわからないまま、ただ「ありがたい。」と言って聞いていました。

疎開先では、食べ物に不自由だったので、物々交換で暮らしました。吉祥寺の家が本屋をやめていなかったのです、本の配給があると、山梨に持っていき、食べ物と交換してもらいました。本のほかに、紙や模造紙のような紙を背中にしょって持っていくと、役場で食糧の切符と換えてくれ、助かりました。

山梨で結婚して、デパートの松屋から主人に仕事に来てくれという話があり、再び武蔵野に戻りました。中島の裏の方の北裏に家を借りて住みました。その借りた家の屋根は、爆撃で穴があいていました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

戦時中の吉祥寺の暮らし

境南町 志賀 礼子

私は当時の武蔵野町に生まれ、昭和十年には、成蹊小学校に通っておりまして。家の近くに畑、野原、林があり、春は、リンドウ、スマレが咲き、土筆が生えており、楽しみながら走り回って遊んでおりました。

昭和十二年七月支那事変が勃発しました。この時は子供で、あまり記憶にありませんが、母が国防婦人会に入っており、白の割烹着を着て、国防婦人会と書いた白の「たすき」をかけ、吉祥寺の駅に立ち、通る人々にお願ひして「千人針」を作りました。千人針は一人一針ですが、寅年生まれの人には自分の年の数だけ刺す事が出来ました。さらに、家には、寅年生まれが、八十歳の祖母、母、姉と三人おり、人から随分頼まれたようです。五黄の寅年生まれの人には、倍刺す事が出来ました。「千人針は日清、日露戦争の頃始まり、五銭玉を縫い付けると、死線を越える」と言われています。

支那事変から四年後の、昭和十六年十二月八日の前日の事です。私は目白にある女学校一年生の時、徹夜会があり、夕方から翌朝までずっと起きて、写経をしたりお茶をたて、

献茶をしたり、座禅をしました。時々居眠りしそうになりました。翌朝、学校から家に帰る途中で、目白駅では、人々が新聞を見て、なんとなく異常に、ざわざわとしているのです。何かと思いましたが、戦争が始まったとの事でした。もうびっくりして夢中で帰宅しました。これが大東亜戦争勃発の朝の事でした。ラジオを家で聴き真珠湾攻撃を知りました。ハワイのオアフ島海岸にいた米国太平洋艦隊の戦艦を攻撃したと聞いております。これは日本の奇襲攻撃でしたが、その時、米国の空母は丁度何処かに出ていて、沈められなかったとの事だそうです。日本は空母、戦艦で攻撃したそうです。この情報は、私の海軍に勤めていた義兄から聴いたものです。

昭和十七年 初空襲 大井町

昭和十八年 空襲 無

昭和十九年 空襲 昼間 B 29

昭和二十年 夜襲

三月十日 都内にある虎ノ門海軍管制本部近くは空襲で義兄が夜帰る時怪我人や亡くなった方が大勢いらした様です。

四月十三日 都内女学校工場も焼ける

五月二十五日 都内、阿佐ヶ谷駅周辺まで

焼ける。

昭和十九年、二十年にかけてB 29が高い所を飛び、成蹊には高射砲が備えられておりました。武蔵野の本町辺りは被害がありませんでしたが、成蹊の近くの友人の話によりますと中島飛行機武蔵製作所のところを目がけてB 29や艦載機が来て、爆弾が落とされ、動員の若い人々の中に多くの犠牲が出たそうです。成蹊の中は陸軍の軍人さんがおられ、士官の人達は馬に乗って五日市街道を行き来しておられたようです。また近所の各家の前には、防火用のコンクリートでできた防火水槽が置かれていました。

私は、女学校三年生後半頃から、下落合にあります「電元社」という飛行機に載せる部品を作っている軍需工場へ、学徒動員されました。朝から夕方まで働きましたが、使われる物になつたかわかりません。当時、下落合に行きますのに、吉祥寺の駅に行きますと、ホームでは栄養失調で立つていられなく、電車が来る迄の間、しゃがみ込む人が多かったです。昭和二十年頃、子供達は栄養失調によりおできができており、シラミ、ノミが頭の毛、衣服についていました。家では、ガラス戸が飛び散らぬ様、糊で和紙を張り十文字にしたり、麻の葉模様にしました。夜間は灯火管制の為、電球は裸ではだめなので、笠に黒い布を取り付け、明かり

が漏れない様にしました。何時からか憶えておりませんがガスが出なくなり、その後は薪でした。最初炭も買いためてしてありましたが、物資が少なくなり豆炭、練炭を使っていました。庭木を薪にしていた様です。庭には防空壕を掘りその中には、食糧品（缶詰類）、セトモノ、衣類、薬などを用意しました。

当時の食糧は、何しろひどくて、大豆の油をとった絞りがすを食べました。また、ふすまも食べました。ふすまは、小麦を製粉したあとのかすです。ふすまに多少ついている粉は焼くためのつなぎに使いました。あと干したニシンがありました。これは配給されて、ひどい目にあいました。要は古いのです。私は身体中、じんましんだらけになり、苦しい思いをしたのが忘れられません。

戦争中、着るものは、上衣は家にあるものを着て、下はモンペかズボンです。靴はズック靴ではなく、近くに靴屋さんがあり、サメの皮で作ってもらったものを履いていました。サメの皮は少し、でこぼこしたような、何とも言えない履き心地で、一回作ってもらいました。

当時、父は京城（今のソウル）におり、姉や弟たちも行っていました。京城の方は、終戦のときまで、暮らしは豊かで、食べるものは何も不自由はなかったみたいです。父は地質学を学び「東洋拓殖」に勤めていました。当時、朝

鮮では金がでました。戦争が終わり引き揚げるとき、向こうには砂糖がありましたので、飴をつくり百円札を小さく入れて飴で包み持って帰ったそうです。預金通帳は持って帰るのに制限がありました。余計に持っていることが見つかる、日本に帰ってくるのができなくなりました。父は、お金をあまり持って帰ることができませんでした。

昭和二十年三月十日、深川が焼けました。警戒警報が出て、空襲警報がでます。空襲警報が出ると、電車の運転がストップしてしまうので、線路を歩いて帰って来ました。四月十三日の空襲では、通っていた電元社も焼けてしまいました。五月二十五日、阿佐ヶ谷も空襲で焼けてしまいました。夜、焼夷弾が落ちますと、今の東急デパートの向こうの東の空が真っ赤に焼けていました。

終戦になる前の暑いとき、外に竈を据え、お釜をかけ、少しのお米、さつまいも、大根を一杯入れ、雑炊を作りました。母が、さあ、ご飯にしましょうと家族が集まってきました。母が、さつきまであったお釜が無くなっているのです。まだ熱いのに、泥棒が持って行ってしまったのです。母は「うちは焼け出されていなかったので家もあるし、しようがないわねえ。」と言いました。母のやさしさに涙がでてきました。でも、私はそのとき夕食に何を食べたのか覚えていません。

主人・信和（没）は、大学の時から招集され、横須賀の海軍に入りました。終戦直後は大湊から横浜まで、捕虜を十六人護送する役目でした。捕虜は栄養状態もよくなって、中には死ぬ人もいました。そのとき、上官の少将が塩、砂糖、カンパン、缶詰を持たせてくれたのはありがたかった、といっていました。終戦後主人は、アメリカ船の水先案内人を務めました。一つの船に三人が乗り込みます。乗り込むときは、これが最期かもしれないと、水杯（みずさかずき）をしたそうですが、とても歓待されました。食べるものもふんだんにあったそうです。

八月十五日の天皇の玉音放送を家族で聞いたとき、戦争が終わる、と涙がでました。どうしても早く終わらせなかつたのか、と思いました。戦争は嫌です。今は平和ボケです。このままでは日本はどうなっていくのでしょうか、心配です。



電元社での学徒動員(提供:志賀礼子氏)

柳沢の空襲体験

吉祥寺東町 服部 次子

中島飛行機武蔵製作所の近くに、下請けの朝比奈鐵工所というのがありました。そこに父が勤めていたのですが、その辺も一緒に爆撃されました。

中島には谷戸に田無試運転工場というのがあり、そこまで単線で、大急ぎで、慌ててつくったような線路が本工場から通っていました。私の実家は、角を切られてすぐ近くを列車が行き来していました。中島に爆弾が落ちたときに、その輸送線路が狙われて、兵隊さんが亡くなったりして、辛い思いをしました。それはとてもひどい空襲でした。

ちょうど今の青梅街道の上に西武線の線路のガードがあります。私の実家は、そのガードから百メートルぐらい保谷寄りです。四月の何日か忘れましたが、時限爆弾が落ちたことがあります。最初、それが時限爆弾ということにわかりませんでした。寝て間もなくのことでしたが、照明弾の光とともに、「チャチャツ。チャチャツ。」という音がするのですが、一体、何の音かそのときはわかりません。まるで、けやきの葉っぱをササツと揺るような物音でした。父が「何だろう。今までにない爆撃が来るのだろうか。」

と言いました。すると、一軒置いて向こう側の方が、「おじちゃん、来て。」と飛んでやってきたのです。その方の家には、井戸があつたのですが、井戸の脇にこんもりと、土が盛り上がっていると云うのです。もぐらの大きい塚のように土が盛り上がっているのだが、何なのかわからない。そこで、父は飛んで行きました。戻ってくると、「穴はないけれども、何だかわからない。爆弾が不発なのかもしれない。」と言いました。

すると翌朝に、ものすごい音で爆弾が破裂して、お隣の井戸が吹き飛んでしまったのです。結局、それは時限爆弾であつたのです。空襲解除になつてから、二、三時間後に破裂するものでした。

隣に住む方は、空襲が怖いということ、他の方の家にある大きい防空壕に避難してしまいました。すると、その避難した防空壕に一トン爆弾が落ちてしまい、亡くなつてしまつたのでした。その中には九人ぐらい入つていたそうです。そのうち四人は助かつたけれども、あとの五人は奥のほうにいたそうで助かりませんでした。父が助けにいったときには、防空壕の形が変わつていました。防空壕の向きまで変わつてしまつたのです。防空壕といつてもただ掘つて、あとゴザを周りにかぶせて、竹の棒で留めてあるくらいの壕でした。うちの防空壕も軽く埋まつてしまい、父が下か

ら戸を手で持ち上げたら、戸が開き、それでようやく私たちは出てこられました。

外に出てみると、お隣のトイレの落しが吹き飛んでいて、割れてはいなかったのですが、中は全く何にもなくなっていて、私たちの防空壕の上にすぼつかぶさっていたのです。その向こう側が、運送会社の車庫だったので、トラックがその向こう側の床屋の屋根に乗っていました。青梅街道は割れて、盛り上がっていました。一トン爆弾の穴があいていましたが、怖くて誰もこれを越えられませんでした。私の母が、気丈な人間でして、「私が越えて向こうまで行って様子を見てくる。」と言い行きました。向こう側の方は、家はかなりやられていましたが、亡くなっている方はいませんでした、怖い経験をしました。

近所では、その体験を書き残すような方が誰もいなかったから、記録のようなものが全く残っていません。田無駅の空襲のことは皆さんよく知っていますが、私たちの柳沢の時限爆弾の被害については、ほとんど残っていないようです。

東京大空襲のときは、所沢街道を所沢に向かって、近所の方と一緒に逃げました。今の前沢になります、当時は竹下という場所でした。農家の方が炊き出しをしてくださって、お芋やおにぎりをいただきました。「所沢がやられ

ているから、引き返したほうがいい。」と言うので、また燃えている空を見ながら、自分の家のほうに戻りました。

学校にいたとき、警戒警報が鳴って、保谷のお友達と二人で飛び出して、都立家政から西武線に乗りました。そこで、ちょうど一年先輩のカトウさんという、田無駅のすぐ前の土建屋の娘さんに会いました。彼女は優秀な方で、いつもいろいろな話をしてくださるので、電車と一緒にいるのが楽しみだったのです。そのときも警戒警報が出ているのに、彼女がいろいろしゃべるのです。それを聞いているうちに、「田無に、父が三十人入りの防空壕を作り、それが鉄筋で出来ていてすごいよ。」と言うので、お友達と二人でその方の防空壕に入れてもらうことにしました。電車は、行つては止まり、行つては止まりでようやく柳沢に着いたわけです。ところが話が弾んで、気づいたら、カトウさんを残し、二人でホームに降りてしまったのです。そこで、まごまごしていると、駅員さんに、「もうすぐ敵機が来るから、そんなところにいたら危ない。」と言われて、引きずり下ろされるようにホームから降りたのです。カトウさんは、電車の中でどうしたのという顔をしていましたが、手を振って別れました。

家に戻ると、もう近所の人も全員逃げたしまい、辺りには誰もいません。皆のいるところに逃げなければいけない

と思い、「田無神社ではないか。」と向かうと、近所の方が皆いました。そのときはものすごい空襲でしたが、神社の縁の下にいた人は皆助かりました。空襲が終わり、ようやく家に戻ると、お友達が飛んできて、「カトウさんが亡くなってしまった。」と言うのです。あのとき私と友達は、何ということなく柳沢で降りてしまったから助かったわけですが、なぜ駅に降り立ったのか、二人とも全く分からないのです。

柳沢に、大きな爆弾が落ちたことを覚えています。ちょうどガスタンクの北側だったと思います。あのときは大騒ぎになりました。近所の大人たちが皆、わけのわからない爆弾が落ちて、途中で電線が何かに引つかかって、破裂しなかったと言っていました。ところが、完全に爆発しないで、何か、ちりちり飛んだらしく、怪我をされた方もいて、体中ガラスで刺されたような感じだったような気がします。もしも、あれが引つかからないで、まともに破裂したら、私たちは命がなかったと父が言っておりまして。

終戦のちよつと前のことですが、近所に自転車屋さんがあり、その息子さんが、特攻隊のようだという話を父から聞きました。終戦から一カ月位前だったと思います。夜、田んぼで男の方のすすり泣きが聞こえるのです。私が玄關のところへ出たら、父が「行くんじゃない。」と言う

ので、慌てて引つ込みました。彼は、お母さんに別れを言いに来たらしいのです。私が見たのは、ただ、たたずんでいる姿でしたけれども、すすり泣いていました。それから何日かして、飛行機で突つ込んだということを知りました。若者の男性のすすり泣きの声というのは、今も頭から離れません。あの兵隊さんはかわいそうでしたね。

終戦の日、父は泣いていましたけれども、私どもは戦争が終わったというので嬉しかったです。でも姉は震えていて、防空壕から出ないのです。まだ敵機が来ていると言うのです。十九日頃まで本当に来ていたようです。

戦争が終わっても、戦後の怖さがありました。青梅街道を輸送のアメリカの車が往来していたのですが、若い女性を通ると、アメリカの軍人が追いかけてきたのです。

私たちの家は、青梅街道からちよつと入ったところにあつたのですが、アメリカの軍人が女性を追いかけて来たのです。その事件があつてから半年ぐらひは、午後四時を過ぎると、母親たちは娘を青梅街道へ出さないように隠しました。また、ガードの下で追いかけてられて、親子で亡くなつた事件もありました。アメリカの支配だから、言つてはいけないと思つて、みんな黙っていました。結構そういう怖いことがありました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。



ショートコラム

米軍艦載機の銃撃で撃ち抜かれた近江屋玩具店

(昭和四十九年八月撮影)

吉祥寺本町 鈴木 育男

この写真は、近江屋さん(現・吉祥寺パルコのあたり)の屋根部分がアメリカの航空母艦から発進した艦載機グラマンの機銃掃射で撃ち抜かれた記録です。(被弾は昭和二十年)吉祥寺の商店街はほとんど戦争の被害を受けませんでした。平和通りの近江屋さんだけ、被害を受けたと記憶しています。

でも人的被害や火災が発生しなかったのは幸いでした。

戦時中は、今のゴダイバさんあたりに大きな防空壕を掘りました。いざ!という時には、逃げ込むつもりで、通りの人みんなで力を合わせて掘ったものです。

(平和通り商店会会報より抜粋)